

ワンナイトのつもりで初めてを
捧げたら、執着系御曹司に
甘く淫らに愛されています

目次

ワンナイトのつもりで初めてを捧げたら、
執着系御曹司に甘く淫らに愛されています

5

番外編 隠しておきたい宝物

285

ワンナイトのつもりで初めてを
捧げたら、執着系御曹司に
甘く淫らに愛されています

プロローグ

「ん、あ……」

「もっと声、聞かせてよ」

優しい声と、優しい手つきに怖いと思う気持ちなどひとつもなかった。耳の奥へと囁きかけてくる声はくすぐったいほどで、その声に身体の奥が震えてしまいその方が恥ずかしかった。

「や、聞かないで」

抵抗するように口元を手で覆い恥ずかしがってもそれは逆に相手を煽ったようだ。耳たぶを甘噛みしながら熱い息を吹きかけるように、甘い声で笑って抱きしめてくる。

「ええ、聞きたいな」

「んんっ」

「可愛いから恥ずかしがらないで」

そんな風に甘やかされるほどより羞恥が生まれて、自分でもどうしたらいいのかわからなくなる。嫌だと思うのに声が溢れて止まらない。

「名前、教えて？」

熱いまなざしで見つめられながら名前を問われ、一瞬戸惑いつつも胸が高鳴る。恋人でもない男性にこんな風に見つめられて名前を呼ばれるのかと……それもお互い何にも包まれず、生まれたままの姿になって。肌と肌を触れ合わせることで伝わる熱に身体の奥が甘く痺れる。同時に後には引けない緊張感。覚悟はちゃんとあったはずなのに。

「その声なんか癖になりそうだな」

「え……」

「そそつてくるっていうか、理性焼かれそうっていうか……」

「はあ、んん」

「だからその声な。すげえいい」

自分の声に、男性を刺激するような特殊なものが備わっているなど考えたこともなかった。だからこそ自分が声を発するのを躊躇ってしまい、息を吐くのでさえより緊張した。

「あ、あ、そこダメ」

「ここ？ そうかな。身体はダメって言ってない気がするけどな」

そう言っ、グッと奥に挿し込まれた指が中をかき混ぜていく。それにより卑猥な水音が室内に響いて自分が一番驚いている。自分の身体からこんなに湧き出てくるようなものがあつたのかと。

「あ、やああ」

「感じやすいね。俺の指締めつけて、気持ちいい？」

「あ、あ……きもち、いつ」

「うん、だからもつと声出しているよ？ もつと気持ちいいってなつてほしいから」

もう十分気持ちいい。ふわふわと脳内が揺らぐほどの感覚に襲われて視点がままならない。抱きしめられると肌と肌が吸いつくようで、その熱に包まれているとより気分が浮ついていく。思考が狂い、まともな判断を鈍らせる、もう目の前に与えられる快感に身をゆだねる以外なす術もなく――

「ああんっ！」

甲高い悲鳴のような声を上げて身体を跳ねさせる綾乃を受け止めるように、抱きしめる腕に力が込められた。密着が増して胸の鼓動が相手にも伝わってしまう、そう思っていたのだが。

――あれ。このドキドキは……

「ん？」

瞳の奥を覗き込んでくる視線が優しい。尋ねるような声の甘さに耳が溶けそうだった。その声に戸惑いつつも気持ちをこぼしてみる。

「ん……ドキドキ、してるから」

心臓だけじゃない、身体中が。高まった体温と乱れた息遣い……でもきつと自分だけじゃない。

「俺もだよ」

「どう、して？」

こんなに手慣れているくせに、そう思う気持ちを読み取られたのか。クスツと笑うと相手は唇を

近づけてくる。

「口……開けて？」

それは優しい誘いだが、拒否権などないように真つ直ぐに攻めてくる。戸惑いながらも息のまだ乱れる唇を開けると、熱い息が絡み合った。距離が近づくほどお互いの鼓動も重なるようで、ドクドクと、全身が鳴いている。

「ドキドキするでしょ。俺が初めてもらうんだもん」

「……っ！」

「これ、今から入るんだよ？ 誰にも触れさせてない場所、俺にくれるんだろ？」

熱を孕む色気のある瞳に見つめられて綾乃は息を呑んだ。熱を帯びて滴る場所に硬く、脈打つものをあてがわれて鼓動が逸る。そして今しがた言われたセリフが脳内で繰り返されるのだ。

――今から？ 本当に？

ぬるぬると、滑らされるほど身体が震えた。ゆっくりでも確実に狭い入り口を開かせるような動きに息が乱れるばかり。知らない感覚、出会ったことのない体感未知でしかないのにどうしてだろう。身体の奥から欲する気持ちが湧いてきてそれに困惑する。

「あ……」

「入っちゃうな」

「ん……」

押しつけられると、ぬちゅつと音が響きその音で腹の奥が疼いた。

「ゆっくり息吐いて？ 大丈夫」

まるで小さい子を宥めるような優しい声で囁かれると綾乃の目尻に涙が滲む。それを舐め取られより身体が震えあがる。

「んあ、はあ、あ、ん」

「痛かったら言って」

「あ……だいい、じょうぶっ」

それでも痛さはあった。初めての感覚を受け止めるので精一杯だ。

でもこれは求めていたことだった。だからその痛みごと感じたい、忘れたくないほどに……そう思いながら綾乃は腕を伸ばし、目の前にある綺麗な身体に自分の身を預けた。

自分を抱きしめてくれるこの肌に、この夜に――

ハッと目覚めると、そこは知らない部屋だった。

広い部屋だ。室内は全体的に落ち着いた、クラシカルなヨーロッパスタイルの雰囲気。白木とステンレスのスタイリッシュな内装、重厚で落ち着きのある部屋の中、ダブルベッドの上でひとり身体を起こした綾乃の肌は、生まれたままの姿で何も纏っていない。その自分の肌をまだぼんやりとする思考の中で見つめつつ、今の状況と昨夜のことを思い出す。思い出そうとするほど身体の奥が熱を帯びるようで、自然と両手で頬を包みながら思った。

――私、本当に……

軽くて張りのある白いデュベ。それをふわりとめくってまたハッとする。そこにある赤い染みを目にした綾乃は息を呑み、改めて実感した。自分の身体が、昨日までと違うのだということを。それを感じると徐々に込み上げてくる思いがあった。

「本当に……処女喪失？」

シーツの上に残る鮮血が生々しい。頬を熱くして昨夜を思い出そうとするものの、酒のせいかわかりとは思えないことばかり。なによりも思い出せないのは相手の顔だった。

――嘘みたい。

本当に行きずりの男と……綾乃は若干震えるものの、この現実を受け入れようと頭を横に振る。そこでふと視界に入ったある物に気づく。チェスト上の一枚のメモだ。

「これ……」

手に取ると、乾いた紙の音が室内に響いた。

【090-XXXX-XXXX 連絡して R】

空気すら高級感のある部屋で過ごすことなど、あと人生で何度あるだろうか。名残惜しい気持ちに残るが、いつまでもここにはいられない。綾乃は丁寧にかけられていた自分の衣服に手を伸ばし袖を通す。室内に忘れ物はないか、再度確認して目に留まるのは残された一枚のメモ。

それに自然と視線が落ちる。もう一度メモの中身を確認するのだが、その手でメモを破り、ゴミ箱に捨てた。

綾乃は振り返ることもせず、部屋の扉を静かに閉めてその部屋を後にした。

第一章 偶然で運命の再会

自分を変える方法、それは三つあると言われている。

「時間配分を変える」「住む場所を変える」「付き合う人を変える」そのどれにでもいえる確かなことは「キツカケ」ではないか。人はそのキツカケや理由があれば変わるものかもしれない。

出勤前、メイクを済ませ鏡に映る自分を見つめる綾乃はソツと自分の頬に触れていた。鏡に映る自分の顔は何も変わっていないのに、不思議とどこか変わった気がする。それは気持ちがそう思わせるのだろうか。

それでも自分は確実に今までとは違うのだと、その現実を噛みしめる。

悩みの種で、綾乃は毎日毎日思っていたのだ。月日が過ぎていくほど、年月が経つたびに焦りが募っていく。このままでは自分を嫌いになっていきそうだ。そう思うほどの悩みから解放されたことで気づく。いかにその悩みに苦しみ、ストレスを溜めていたのだろうか。鏡の中に映る自分は、今まで見たことがないような晴れ晴れとした表情をしているのだから。

藤谷綾乃、二十六歳。

長年悩み続けた処女を捨てた。

処女を捨てたい——それは、綾乃が望んで望んで、願い悩み続けたことだった。

綾乃が勤めるオフィス・ハジュリエは『抱きしめたくなるような家具』をコンセプトにし、温かくて上質な空間を提案している家具専門の企業である。

Hug（抱く）+ Atelier（アトリエ）の造語から付けられた社名で、もとはMIKADOグループ傘下の家具ブランド会社。その広報アシスタントとして勤務している。

MIKADOグループは元々、高級注文住宅から始まる会社だった。ハウスメーカー・建築系企業を筆頭に上場し、今や家具や内装にも力を入れた子会社展開をしていた。

家具製造業は、変化する市場環境に対応するためにも新規事業の立ち上げが必要だった。新規事業を立ち上げることは、企業が生き残るための鍵にもなる。新しい市場への進出や製品ラインの拡充はリスクを伴う分、成功すれば収益の大きな増加が期待できる。そして新規事業によって企業自体のブランドの認知度向上にも繋がるのだ。その狙いを含め、MIKADOグループの上層部は新ブランドを立ち上げることに決めた。

『日本の暮らしにも感性を』

もとは高級住宅から始まり周辺分野へ展開してきた企業である。時代の変化とニーズに合わせ、家も暮らしも人に合わせて変わりつつある。どこに住むか、どんな環境で暮らすか。大事にしたいのは場所か。ものが溢れる世の中で、自分の欲しいものをうまく選別しなければ見つけれられないものも多い。

大事にしたいもの、それは人それぞれである。それでもどんな人間にでも必ず求めるものがある。それは居心地ではないか。

そのコンセプトに則り、グループ傘下の企業ハジュリエで『心地よさ』を追求する家具ブランドにフォーカスをあて、新ブランドを設立することになった。グループ企業ではなくあえて傘下企業に新ブランドを立ち上げさせることになったのにはもうひとつ理由がある。

MIKADOグループの創業者一族である神門家（みかど）の息子が海外から帰国し、立ち上げに参入することになったからだ。海外で学んだ手腕を買われ、本体ではなく系列企業を任されて送り込まれてくる。それは、次期社長候補としての実力を試されているともいえる。

神門凌一（かみんりゅういち）、三十一歳という若さながらすでに海外では何社か起業・売却に成功している実力者。表に名前は出ているが、社内ではあまり顔を知られてはおらず綾乃も息子の顔までは知らない。本体企業の社長令息などそもそも興味がないのもある。

自分とはかけ離れた世界にいる雲の上のような人で、この新ブランドの立ち上げでもない限りお目にかかることもないだろう。そもそも出会うきっかけさえない相手だ。

そんな次期社長候補がこのオフィスに訪れるとあって、バタつくのも落ち着かないのも当然である。綾乃も準備に走り回っていた。すでに配布されている新ブランドの資料を見直す綾乃は、その紙に記されているブランド名を見て頬を緩めた。

「INNER——inner（内側）」と、フランス語の響きからつけられたブランド名は真っ直ぐに綾乃の胸をついた。響きが、そこに込められた思いが好きだな、そう思った。

内面の心地よさを追求する、暮らしの『中』に寄り添う家具——この企業を選んだのはコンセプトに惹かれたからだ。

綾乃は派手なものを好まない性格で、どちらかというと地味で質素に生きることが好きである。その慎ましい暮らしの中で、大切なものに囲まれて暮らす何気ない生活に充足感を覚えていた。

自分の手で、好きと思うものに触れてそれを傍ら（かたわら）に置きたい。好きなものに囲まれた生活は心を潤おしてくれて、また頑張ろうと思える。

大事にするほど愛着が湧き、大事にするからまた好きになる。

普段の服やメイクなどは社会人における最低マナーレベルで、大量生産販売されているようなコストパフォーマンスの高い店で購入したりしているが、綾乃の家の中に並ぶ家具や小物は一点物やアンティークが多い。給料の大半はいわば趣味に注がれていた。

外側からはわからない、内側では好きなものに囲まれてそれらを愛でて密かに楽しむ……それが綾乃のおひとり様ライフである。

そんな趣味にばかり走る自分、それはどれだけの人の理解が得られるだろうか。

高価なものを買うこともある。もちろん飛びつくことはしない。吟味に吟味を重ねて、本当に欲しいものかを何度か心の中で問いかけて、思い切って買うことが常だ。それでも家具や小物に大金を使うことを理解できない人間だって当然いる。趣味嗜好こそ人それぞれなのに、自分の中に受け入れられるキャラがなければ許容してもらえないのは辛い。それこそ綾乃の元カレはその理解してくれない人間だった。

『はあ？ こんなもんに数万するわけ？ 信じられないんだけど、これにそんな大金払ったの？』
欲しくてやっと買えたものだ。それに対してこんなもの扱いを受けて綾乃の心は傷ついた。
彼氏にわかってもらいたかったわけではない。これいいでしょう？ そんな風に同意を求めたわけでもない。

ただ、自分が気に入って欲しくて手に入れた、自己満足のものだ。それでも価値観の違う興味のない人間からすると、綾乃の欲しかったものはこんなものと言われる代物だった。

——無理。

そこで気持ちは一気に冷めた。二十代前半、社会人になり、頑張つて貯めたお金で思い切つて買ったものをそんな風に言われた相手に、綾乃の気持ちは瞬間で離れてしまった。

それでもすぐに別れることはしなかった。価値観の違い、そう呑み込んだが身体はそんなに簡単なものでもなかった。

初めて付き合う彼氏、当然何もかもが初めての相手だった。だからこそかもしれない。傷ついた心は、わかりやすく身体にも拒否反応を示してしまつたのだ。

『なんで？』

『ごめん……』

あからさまに拒否をしてしまい最悪な空気になった。キスも嫌だった、までは言わなかったがもう一度しようと言われたらどうしよう、そう思つた時点で無理だろう。答えは出ていた。

『綾乃ってさ……なんかつまんねえな』

その言葉は何も防御していなかった綾乃の胸に真つ直ぐに刺さってしまう。

『流行りとかにも疎いし、変なもん好きだしさ。もつと外見気にしたり……見た目っていうの？ 努力とかもした方がいいんじゃない？』

それは日ごろからチクチクと言われていたことだった。

足りていない、自分に対して費やすもの。服やメイク、着飾ることを最低しかせず彼氏を喜ばせられたことはなかった。でも彼氏は言ってくれていたのに。

綾乃のその素直で飾らないところが好きだよ、と。そう言つて告白してくれたから受け止めたのに、あれは一体何だったのだろう。

——あなたの色に染まられて言うの？ 自分好みの女がいてほしい、そういうこと？

『そんなんでさ、彼氏の気持ちにまで応えられないとかなないよな』

彼氏の気持ち——それはセックスのことか。心の中でモヤついていた言葉の上に、さらに被せるように突き刺してきた言葉。人生初の恋人にはそう言われて振られてしまった。

それが当然トラウマになり、それから自分に自信も持てぬまま処女を拗らせて数年。

変わるキッカケが欲しかった。この枷になった重い柵しかしから解き放たれたい。それでもどうしたって、自分ひとりの努力では解決できないことだ。

付き合うなら好きな人と付き合いたい、でもまた好きな人に傷つけられて心も身体も受け入れられなくなったら……そう思うと恋だつてできない。恋ができないならずと自分は処女のままか。

そう思うとたまらなくなつた。

そして思い立ってしまったのだ。思い立ったらもうダメだった。

綾乃はひとつの覚悟を決める。

ワンナイトを狙って後腐れのない相手と手っ取り早く処女を捨てる、そう決意した。

時計の針はもうすぐ十時を指そうとしている。スタッフはみなソワソワと落ち着かない様子だ。

「代表ってどんな人なのかな」

綾乃の後ろでヒソヒソと話す新人の声にこっそりと耳を傾けていた。

——気にはなるよね。なんせ社長の息子だし、経歴もなんだか華やかだし。

海外で起業して、英語・フランス語も堪能らしい。そしてどうやら顔もいいらしい。そこにブランド創設者の実質トップという肩書まで背負ってやってくるのだ。誰でも興味関心を持つのだが、綾乃はさほど興味はない。それよりも今日のランチどこで取ろうかな、くらい呑気にその場に立っていた。

途端に廊下からざわつく音がしてオフィス内の空気も変わる。

「来たー！」

誰となくその気配を感じて全員が席を立ち、現れる代表の姿に胸を躍らせていた。

軽い談笑をしているのか、廊下から聞こえる声たちは明るく弾んで聞こえる。重い空気は感じない、むしろ綾乃たちが待ち構える室内の方が、よほど空気が重く張りつめている。

ガチャッと扉が開き、一斉にその先に視線が送られる。おそらくほぼ全員が息を呑んだのではな

いか。

——イケメン。

扉の向こうから現れたその姿を見て、誰もが思っただろう。綾乃もちろん思った。あまりイケメンと関わる機会はない綾乃だが、心の中でその言葉が真っ先に湧いてくるほど整った顔をしている。聞いていた年齢よりも若く見えた。どちらかというと言童顔か。綾乃はそんな風に静観する。

「すみません、お待たせしました」

建前のような挨拶である。待っていたのはそうでも時間びつたり、謝ることなどひとつもない。それでも神門凌一と思われる人物はフワッと笑ってそう言った。

「仕事の手を止めてお待ちいただけます。神門です。このたび、ここハジュリエで新ブランドを立ち上げられることになり光栄に思います。みなさんのご協力が必要です。若輩者ですが何卒よろしくお願いいたします」

ブランド創設のトップなのに謙虚な挨拶だと、スタッフはすでに心を掴まれたような空気に包まれる。綾乃もちろん、人当たりのいい人だ、そう感じて見つめていた。

「INNOEは、帰ってきたくなる空間を内側から丁寧に創る……それがコンセプトです。MIRKADOはどちらかというと、ブランド力が勝ってしまったラグジュアリーな雰囲気定着してしまいました。だからINNOEで親しみやすさや感性寄りのデザインを押してそこをリカバリーできたらなど。高級感は大事です、いつどんな時代でも憧れられる。でもそれだけじゃなくて本物志向を大事にしたいんです」

——え。

「今は量産時代ですし、コスト削減や品質の均一化の精度も出せるなどメリットは多い。流行りに乗るのも大事だし安定供給ができてこそ。でもだからこそ小ロット生産……量産ではなく少ない数量を生産する方式で、多品種少量生産を目指したい。生産効率はもちろん低くはなるけど、多様な製品を少量ずつ生産することで価値が高まる。ここだから手に入るもの、そこを狙いたい」

気づくと綾乃はジッと見つめて聞き入っていた。

新ブランドに込められた本質的な理由、秘められた思いに触れて自然と胸が高鳴っていた。

このブランドが成功してほしい、素直にそう思った。

「まあ手探りもいっぱいあるので。一緒にやってみよう」

ハハッと笑う顔が可愛かった。綾乃は自分より年上の男性にそんな感情を無意識に持つてハッとした。

——こちら。相手は社長の息子で代表だぞ。

可愛いと思える要素はゼロである。

「あの！ 代表！」

スタッフの一人が声を上げると神門凌一は笑って手を挙げ「ちょっと待って」と、言葉を宥めるように遮る。

「気を遣われるのは覚悟で来てるけど、僕はまだここでは何者でもないの。ブランド創設者ではあるけど……そうだな。ブランドディレクター、みたいな感じ？」

同行したチームの一人に、同世代より少し年配の人物がいた。軽い口調で確認するように視線を送ると、その人物は静かに頷いている。

「そう、だから呼び名ですけど、いろいろ呼ばれると照れるので。神門でいいです。肩書とかじゃなく名前で呼んでください。連れてきているチームみんなも下の名前で呼んでますから」

「あ、はい。では、えっと神門さん……」

遠慮がちに呼んだスタッフに「はい」と笑顔で対応する姿はどう見ても好感度が上がる以外ない。最初に周囲が感じている格式の壁を取り、かつ仲間意識を滲みださせてスタッフの士気をあげた。一緒に頑張りたい、ついでいこうと思わせるリーダーシップ、それをいきなり示してきた。

——すごいひと……

やっぱり見惚れてしまうが、今回はその視線を本人に捉えられてしまう。バッチリと目と目が合う。すぐにその目を逸らされると思っていたのに、相手は一瞬目を見開いてクスッと笑った。

——え？

思わず綾乃は周りを見渡した。そして思う。

——私？

今のは本当に自分に向けられた顔なのだろうか。戸惑うものの、地味な自分に気のせいだろうと、あまり気にせず目を伏せた。

ざっくりとした顔合わせが終わり、業務に戻ろうと全員が動き出す。綾乃も新ブランドのレセプションに必要な参加者リストや、配布資料の準備のために席を立った。オフィスを出て廊下を歩き

だした時だ。ツンツと後ろに引つ張られるような感覚に首が自然と背後に回った。

「え？」

振り向いてギョツとした。綾乃のローポニーの毛先が絡めとられている——神門凌一の指先に。

「……っ」

あまりの衝撃に声が出ない。何？ なぜ？ そんな言葉が脳内で繰り返されているのだが、声にはならない。驚いて言葉を失う綾乃に、神門凌一は問いかけてくる。

「ねえ、どうして電話くれなかったの？」

その予想外な言葉にまたも驚く。

「ガチでやり捨て？ ひどくない？」

——え!? 待って、嘘でしょ。

目の前の男は一体何を言っているのか。聞き返したいが聞きたくない気持ちが勝った。

そう、聞きたくないと、綾乃は直感で思った。

「あんなに可愛く俺のこと誘ってきたのにな？ 忘れちゃってんじゃない、覚えてないの？」

綾乃の脳内は今真っ白である。だからこそ何も言えず固まっている。

「うわ。マジか」

先ほど前に立ち、挨拶をしていた人物とは思えぬほど軽い。街角でもしこんな風に声をかけられても間違いないシカトしそうだ。さっきまでのシゴデキオーラはどこにいったのだろう。好感度抜群のイケてる上司感は一体どこへ。ただの軽薄そうな男が目の前にいる。

「ねえ、聞いている？」

「は、はい……」

聞かれたのでとりあえず返事をした。返事に深い意味はない。声は聞こえている、ただそれだけの意味の返事をした綾乃に、神門凌一は淡々と話し続ける。

「電話、欲しかった」

「で、んわ」

会話の流れと状況で、察したくはないが察するしかなかった。

電話、やり捨て、誘った、忘れた、覚えていない……それらのワードに心当たりがない——などと誤魔化せるものがひとつもない！

「番号書いたメモ、連絡待ってるって……見てくれるよね？」

メモはあった、目覚めたホテルのチェストの上に一枚。そこに記されていた電話番号とメッセージ、そして最後には何と書かれていたか。

「え、み、かど……」

「凌一」

りょういち……R y o i c h i……綾乃は脳内でアルファベット変換して目を見開く。

「あ、あーるっ！」

「確認した上で、破り捨ててくれたわけだ……ますますショックだわ」

「ええ!?」

「会えて嬉しいよ。あれっきりも寂しいからね。今日からよろしく」

——ううう、嘘でしょ!?

人生とは何が起きるかわからない。予期せぬ出会い、はたまたこれは運命か?

——そんなわけなあい!

綾乃は心の中で絶叫した。先ほどからずっと頭を抱えている。

——まずいまずいまずい。そもそも覚えていないことがまずい!

まずいことはいろいろあるのだが、なにより一番まずいこと、それは綾乃にさほど記憶がないことだ。思い出したくても思い出せない、それがまずいと綾乃は思った。

言い訳やこじつけをしたいところで思い出せない以上何も言えない。本当に「覚えていません」それしかないのだ。

——忘れたっていうかあ……記憶がない。

あの夜は酒に酔っていた。

綾乃は普段からさほど酒を飲まない。理由は単純で、すぐ酔いが回ってしまうほど酒に弱い体質だからだ。飲む機会や誘われた場でも、付き合い程度に口をつけるのが精一杯で、常に気遣い程度の飲み方しかしてこなかった。

だから、あの夜は特別だった。特別であり、イレギュラーだった。飲まなければやり過ぎないだろうと考えた、苦肉の策だったのだ。それが仇となり、酒の失敗を招いてしまった。飲むべきで

はなかったなど、今さら後悔しても後の祭りだ。

——どうしよう、どうしよう、どうしよう……あの夜の? ワンナイトの相手ってこと? それってつまり私の……

「きゃー!」

「うわ! なんっすか、藤谷さん!」

「なな、なんでもない! むむ、虫がいた!」

「びっくりしたあ、いきなり声を上げないでくださいよお」

隣の席の後輩が、いきなり叫び声を上げた綾乃に驚いてぶつぶつ言っている。オフィスでいきなり声を荒らげた綾乃が全面的に悪い。

——待ってよ! つまり、その、あの……私の処女喪失相手ってことお!?

穴があったら入りたいはこのことである。けれど入ったら最後、出ることはできないだろう。すなわち逃げるが勝ち状態である。

——もう逃げ出したい!

目の前の現実から今すぐ走って逃げ去りたい、綾乃はそれほどまでに思っ頭を抱えている。

「藤谷さん!」

青ざめる綾乃を呼ぶ声に顔を上げると、上司が手招きをしていた。避けたくても仕事がある。悶々としている綾乃にまさかの指令が飛んできた。

「ええ! どうして私が!」

「どうしてって……PR戦略打ち合わせはあなたの担当でしょうが。質問とかの資料も自分で作っておいて何を言ってるの」

「そそそ、そうですがあ！ 私じゃなくてもできるかなって」

「じゃあほかに誰がするの？ みんな仕事は手いっぱい。今さらほかの人に振るのは酷でしょう」
「そう、そうなんですけどお！」

泣きそうになりながら訴えた綾乃だが、上司がそれを優しく受け入れてくれるわけもない。

PR戦略の打ち合わせ、それをもとに新ブランドをどう盛り上げていくかが決まる。さらにブランド創設者にインタビューも重ねることで、ブランド力を一気に引き上げようという企画だった。企画したのは綾乃本人である。

——なんでこんな企画した私……

いきなりふたりきりでのインタビュー、なかなかハードルは高い業務である。早速ミーティングルームで見つめ合う状況が発生してしまった。

目の前でニヤニヤする凌一と鬱々とした綾乃がふたりきり。これは仕事だと、綾乃は覚悟を決めて口を開いたのだが。

「い、いろいろお伺いしたいことがあります」

「あの夜のこと？」

「新ブランドのことです！」

いきなり囁みつかせてくる。わかりやすく言い返すと、凌一はおかしそうに肩を震わせていた。

——ば、バカにしてえ！

綾乃は怒りと羞恥心で、身体の震えを止められずにいる。

「こ、今回のPR戦略の打ち合わせで明確にしたいのは達成したいゴールです。方向性やキャッチコピーを前面に出したいので、そのすり合わせをきちんとさせていたきたいです」

「うん、そうだなあ。まずは新ブランドを広く認知はさせたいよね。世界観とかカラーを強く印象付けたい」

「カラー、ですか」

「ターゲット世代は三十代、デザイン感度の高めな女性、あとは豊かな暮らしを求める家族層とかな」

「家族……」

綾乃はパソコンで打ちながらも凌一の言葉を繰り返す。

「温もりの追求」

「温もり？」

「藤谷さんはどう考える？」

「え、私ですか？」

茶化す感じでもなく真面目な声で真っ直ぐ見つめられて空気が少し張りつめるのだが、責められているわけではない。綾乃は「ふん……」と小さく頷いて、表現に迷いながらも自分の言葉で答えた。

「温もりって物理的なことと言えば温度ですけど、それって感情でも言えると思います。そのふたつを兼ね備えるなら、手に触れた時に嬉しくなる気持ちを言うのかなって。あったかいものに触れても単純にジワツときますよね」

凌一は黙って綾乃の言葉の続きを待っている。その姿勢に焦るわけではないが綾乃も言葉を選ぶのにとまどいつつも思うまま声に乗せて思いを綴る。

「心がほどける瞬間。自分の心を包めるような気持ち、大切なもの……ですかね」

「大切なもの、それってどうやってたら手に入るんだろう？」

——え。

「どうやってたら手に入るって言えるんだろう」

「……最初から手に入るって思っていると遠ざかるものじゃないですかね。それよりも、大切にしたいって思える気持ちに出会えた時に、その想いに向き合って時間をかければ、自然と育まれるものではないでしょうか」

そう答えた綾乃に、凌一は何も答えない。

「うーん、うまく言えなくてすみません」

「気づいたら離れられなくなってる、そういう感じ？」

——あ……そうかも。

綾乃の思いは声にはならなかった。うまく言葉にできない気持ちを代弁してくれた凌一の言葉。同調するような気持ちを綾乃の表情で汲み取ったのか、凌一はくすりと微笑んで言った。

「いいね。コンセプトにもリンクしてINNOEに合ってる。それをキャッチコピーにして売ろうか」

「え」

「コピーセンスあるよね。過去のコピー案とかECサイト向けのストーリーとか見たよ。うまいなって思ってた」

出社する前からいろいろ見ていたのかと綾乃はそこで驚いたのだが、褒められたことにも驚いた。自分のしている仕事が認知され、褒められると自信に繋がるものだから単純に嬉しい。

「あ、ありがとうございます」

「新ブランド立ち上げ時は、PR命だから。宣伝効果で認知度も売り上げも全然違う、バズれば儲けもんだ。頼りにしてる」

「は、はい」

いきなりそんな言葉を投げられて照れてしまった。どの方面から見てもすごそうな人に「頼りにしてる」そんな言葉を投げられて喜ばない人間はいるのだろうか。

——お世辞でも嬉しい。

綾乃が胸の奥でそんな気持ちをひっそり抱えて、頬をほんのり染めていると爆弾が飛んできた。

「俺に興味ないよね」

「は？」

「反応がさ。未だかつてないくらい新鮮っていうか……塩対応」

「し、塩……」

「覚えてないって、結構シヨックなんだけどね」

まさかここでそんな話になるとは予測していなかった。しかも仕事のことで褒められて舞い上がりかけていたところに、真正面から水をかけられたような衝撃である。綾乃は慌てて言い訳を始めた。

「そそ、それは……あの夜は酔っていたし、その……」

「まあ、酔ってはいた」

「です！ だからです！ お酒のせいです！」

「酒のせいって……それを正当化されるのは狡いなあ。あんなに激しい夜を過ごしたのに」

「だあ！ そういうこと言っちゃダメ！」

「ははー！」

勢いよく椅子から立ち上がり、声を荒らげる綾乃に噴き出す凌一は完全に面白がっているように見える。押揃からかわれているのがわかるので綾乃も下唇を噛んでわなわなと震えるしかできない。

「思い出してよ」

凌一がフツと微笑んでそんな言葉を吐く。それに綾乃は目を見開いた。

「忘れたままでいてほしくない」

——ちよつと……待って。

「俺は忘れてない」

予期せぬ再会、予期せぬセリフ。これは運命かも、とバカみたいな言葉を脳内で思い浮かべる綾乃だが、そんなロマンチックな言葉は一瞬で打ち消した。

それよりも思うのだ。

目の前の男・神門凌一は、逃げたい自分を絶対に逃がそうとしない。

瞬間それを感じとった綾乃は背筋を震わせつつも、なんとかPR戦略の打ち合わせを終えたのだった。

ただか一時間ほどしか話をしていないのにひどい疲労感である。パソコンを閉じ椅子から立ち上がった綾乃にまた凌一が声をかけてくる。

「ねえ」

ビクリと肩を震わす綾乃だが、拒否できる立場にないのだ。恐る恐る振り向くと笑われた。

「取って食うわけじゃないんだからそんなに怯えないでよ」

なら声をかけるな、と言いたいところだが当然言えるわけがない。何も言わずに目を伏せる綾乃に凌一は小さな溜息をこぼすと優しい声で聞いてきた。

「忘れたままでいいの？」

問われた質問に綾乃は答えることができない。

「あの日の自分を、知らないままでいいの？」

そんな風に聞いてくるのは確信犯なのか。聞かざるを得ないことを聞いてくる。

「……もしかして私、変なこと言いました？」

嫌な予感しかない。知らない、覚えていないことの最大の恐怖はそこなのだ。自分が予測できない行動や発言をしていたらどうしよう、その不安が漠然とあったからだ。

聞き返す綾乃の質問に今度は凌一が口を噤むので、綾乃の背中を一筋の汗……俗にいう冷汗ひやあせが流れ落ちる。

「誤解されても困るしね。状況把握はしとこうか？」

ニヤリと笑う凌一がいて、そんな凌一に見つめられる綾乃は顔面蒼白状態である。

「連絡先教えて」

スマホを取り出されてあれよあれよと勝手に番号を登録されてしまう。

あの夜、破り捨ててきた番号。まさかこんな形で綾乃のスマホに登録されるとは思ってもみなかった。その番号を見つめる綾乃は、そんなことを思いながらその場で倒れそうになっていた。

予期せぬ出来事に疲弊する綾乃の一日は、このまま静かに終わると思っていた。だが、現実綾乃の想像もつかない方向へと動き始める。

——なぜなの……

出会った初日で、まさか二回も向かい合って座ることになるなんて。

あの後、ミーティングルームから出てオフィスに戻り、自席についてやっと息を吐いていると、スマホが震えた。液晶画面を見てサアツと青ざめた綾乃はデスクに額を落とした。先ほど別れたばかり、そしてこの男はオフィスに来て初日、仕事が山積みのはずだ。そう思うのになんと綾

乃をディナーに誘ってきたのだ。当然断れるわけがない綾乃は、しぶしぶ了承の返事を送ったのだが、数時間後には店のURLが送られてくる。指定された時間にその店へと素直に足を運び、今に至っている。

「嫌いなものとか苦手なものある？」

「とくにありません」

「え、すげえ。俺は嫌いなものいっぱいある」

あっそう、と綾乃は冷ややかに心の中で返していた。

イケメンに誘われて、お洒落で高級そうなお店でディナー。世の女子なら、この状況は舞い上がるほどのいい夜かもしれない。しかし綾乃はそんなテンションには全くならないし、むしろ落ち着かないほどである。

——私、普段着みたいな大した服じゃないけど、これ大丈夫？

空気感も雰囲気も、自分が今まで触れてこなかったような知らない世界。身の置き場に困るし居た堪れない。

「迷惑だった？」

「……………いえ」

「迷惑なんだ」

短い沈黙を答えと捉えた凌一は、おかしそうに笑った。

「シラフでもそんな感じなんだな」

——え？

凌一の言葉に顔を上げた綾乃は見つめられてドキリとする。これは何もときめいたとかそういういた類(たぐい)のドキリではない。イケメンに見つめられることに免疫がないだけのドキリである。

そんな言い訳をいちいち胸の中で繰り返す自分はバカみたいだと思うが、慣れていないのだ。イケメンと向き合うようなこともなければ、煌びやかな店でディナー経験もない。質素な暮らししかしてきていない綾乃には目にするものすべてが分不相応に感じられた。

「覚えてることは多少なりともあるでしょ？」

その質問はつまりあの夜のことでよな、と綾乃は察するのだが、複雑な気持ちに襲われる。

「ほぼ」

「え？」

「覚えていることさえもはや曖昧かもしれません」

「ほぼ……ない、なの？ マジ？」

そう返した凌一の声色からは、隠しきれないショックが滲み、それは綾乃にも伝わってきた。これまでも言葉ではそう言っていたけれど、今の響きが最も切実だった気がする。

そして思うのだ、心から申し訳ないと。

「なので……忘れてもらって構わないです」

綾乃はぼつり、こぼす。

「私自身がこんな感じですので……状況的にも、とても面倒くさいことをさせました。罪悪感を

持っていたいてるのではないかなと思っています。ですが、そんなお気持ちは不要です。本当に、お気になさらず、不慮の事故みたいに思ってください結構です」

「それさ」

声に反応して顔を上げると凌一に真っ直ぐ見つめられていて、気まずく思うもののその視線を逸らすことはできない。綾乃もジッと見つめ返すと問われた。

「忘れたいことなの？」

「え」

「ブラックアウトしてるって……それこそ事故みたいな感じに聞こえるんだけどさあ。覚えてないだけの話だね？ 記憶が飛んでるんでしょう？」

「は、はい」

「忘れたいわけじゃないんでしょう？」

「え……」

そう言った声が、綾乃の表情が、答えになってしまふ。そう問われて、綾乃自身もあの夜を忘れたいものにしたいわけではないのだと思ひ知らされる。単純に記憶にない、覚えていないだけだ。それを凌一も悟ったのだろう。フツと微笑んだと思うとニヤリと表情を変えて言ってくる。

「質問を変えよう」

いきなり声を弾ませる凌一が、覗き込むように見つめてきて問うてくる。

「知りたくない？ 俺と君がどうやってその行為にまで至ってあの夜を過ごしたのか」

「それは……っ」

その質問は狡い、綾乃はそう思った。

——知りたくないわけ、ないじゃない。

本当はずっと知りたい、知りたかった。

重かった柵が外れたあの夜、それは自分が長年望み続けた願いだったから。それをどのような形で手に入れて、あの夜を過ごすことになったのか。

「……し、りたいです」

素直に頷いた綾乃に凌一はどこかホッとしたような表情を見せた。綾乃は真面目な性格なのだ。そんな綾乃の性格をこの数時間で汲み取ったのか、凌一も言う。

「良かった。ちゃんと話がしたかったよ、俺も。あの夜をもう一度振り返りたい」

「え……」

「俺も、もつとちゃんと知りたいんだよ」

——知りたい……は、何を？

綾乃はその思いを声にはできず心の中で呟いた。それがもちろん凌一に伝わるわけではない。

不安そうに見つめる綾乃を見つめ返してくれる凌一の瞳は優しく、綾乃は無駄に心拍数を上げていた。そんな時だ。

「絡まれてたんだよ。男に」

凌一に言われた言葉は予想外で、綾乃は率直に驚いた。え、と驚くも声にならず、それでもやは

り表情から綾乃の気持ち凌一は察したのだろう。フワッと笑みを浮かべながら語り始めたのだ。あの夜のことを。



帰国してから、凌一はホテル滞在を続けていた。このホテルの最上階に位置するレジデンシャル・スイート、このインテリアと内装は、MIKADOグループがプロデュースしている。ホテル側としても、内装を手掛けた神門の御曹司が滞在し、プロの視点からメンテナンスや仕様の相談に乗ってくれることは願ってもない好機だと、凌一の長期滞在を快く、かつ最優先に受け入れてくれた。帰国した凌一にとっても、実家の干渉やメディアの目を遮断できるのは都合が良かった。海外から呼び寄せた精鋭スタッフたちも同じフロアに住まわせて、二十四時間体制で新ブランド立ち上げの準備を進めていた。

凌一もその日はひとりで飲んでいて。息抜きも兼ねて、バーには何度か足を運んでいる。落ち着いたバー、飲みなれた味を楽しんで部屋に戻るつもりでいた。いつもと違ったのはカウンターにひとり飲む女がいたこと、そしてその女はひどく酒に酔って見える。どちらかというと悪酔いしているその姿を見て思っていた。

——いいカモだな。

数席離れた位置から横目に見つめつつ、なんとなく認識していた、それだけの状況だった。案の

定、ひとりの中年男が声をかけた。空いた隣席に座り、やたら距離を詰めてバーテンダーに何かオーダーをしている。作られたのはショートカクテルでオリーブが入っていた。

——マティーニ？

かなり度数が高めのショートカクテル……もうすでに酔っているのに？ 凌一はそこで知らんぷりができなくなった。

「もう一杯どう？」

マティーニを差し出したその男の手から、グラスを奪い取っていた。

「それお前が飲めよ」

「は、あ？」

「もう酔ってんだろ。そこをさらに酔わせてどうしたいわけ？ ダセエことしてんじゃねえよ」

圧をかけると一発で男は逃げていった。それを酔った顔でぼんやり見上げてくる潤んだ瞳に、凌一は「ちっ」と胸の中で舌打ちをこぼす。

「あんたもあんただよ。隙だらけで襲ってくれて言ってる。バカか」

そうキツク言い放った。力なく項垂れる姿を見せられると、わずかながら罪悪感のようなものが芽生えた。それでも状況をちゃんとわからせたかったただ、と自分に言い聞かせる。微動だにせず俯いたままの姿に、まさか泣いているのか——そう訝しんだ矢先だった。

「助けてなんて頼んでない」

——は？

お礼を言われると思っていた凌一だったが、突っぱねるような言い分に眉を顰めた。下心全開の男から、困っているところを助けてくれた男……ときめかれてもいいはずだ。自分はそこまで見栄えも悪くないし、好感度だっていいから。その自覚があったからこそ好意的に受け止めてくれるだろうと自惚れていたのかもしれない。それなのに、助けた自分にお礼を言うどころか、拗ねたように顔を背けて吐き捨てるみたいにそのセリフを投げつけられた。

「ほっといてくれてよかったのに、余計なことしないでよ！ せっかく……」

「……せっかく？ 何言ってるの？ あのままでたらあいつにどっか連れ込まれてやられてたぞ」

責めるようにそう言った凌一の言葉で、また顔を俯かせてしまい内心胸が痛んだ。心配してはいたが、それでもキツイ言い方をしたかもしれない、そんな後悔が押し寄せる。

「いや、あの……」

「それで良かったのに」

——は？

心の中で同じ言葉ばかり繰り返してしまふ。

今なんと言った？ 吐き捨てるような物言いと、その突き放すような言葉たちに凌一はいろいろとついていけなかった。拗ねたような顔でそっぽを向かれ、そんな言葉を吐かれて「はい、そうですか」と、凌一も黙っていられなくなる。単純に、腹が立ったのだ。

「良かれと思って助けたのに、まさかそんな風に責められるなんてな。そりゃあ、チャンス潰して

悪かったな、ごめんね？」

「そうよ……チャンス潰された」

わざと嫌味っぽく言ったのに、それにもまた言い返されて余計にカチンとくる。そんな挑発的な言葉に素直に乗せられる凌一は、またバカみたいに言い返してしまった。

「チャンスだって？ 本気で誰でもいいのかよ」

——嘘だろ？ なんて？

そう思わずにはいられない。普通に可愛い顔立ちをしていて、直視するとなおそれを実感した。大人しそうな雰囲気だが、男を惹きつけるタイプに見える。こんな場所で酔ってクズみたいな男に引かかるような子には見えないし、引つける必要なんかないだろうと、そう思った。

儚げだがどちらかといえば可愛い印象。落ち着いて、静かなその雰囲気はそられてしまう。これは酒のせいだろうか？ 火照る頬がやたらと色気を含んで、酔った瞳が熱を孕むように潤んでいる。声をかけられて当然、あわよくばワンチャン……目についた男は絶対そう思うだろう。それくらい隙だけである。それが狙いだっただのか。わざと声をかけてくる男を待っていたとは。

——小悪魔系？ 遊んでいそうには見えないのにな。

そのアンバランスさは余計男を煽る。暴いてみたくなるような、素顔に触れたくなるような。そこで魔が差したのだ。

「誰でもいいのか、それなら俺が相手してやろうか？」

口にしてからハツとして、即座に自分自身へ毒づいた。何を言っているんだ。それでも、思っ

てしまう。

酒に酔って、隙だらけで、声をかけられるのを待っているなんて気がしれない。世の中には本気で危険な奴も、犯罪の牙を隠し持っている奴だって掃いて捨てるほどいる。そのリスクすら想像できない浅はかさと考えのなさに、苛立ちが募り自覚させなくなった。

だから下心ではなく、その低い自己意識を指摘したくて煽ってやったのに、瞳が開いて見上げてきて……言うのだ。

「ほんと？ 私と……できる？」

できる、とは？ その言葉の意味と真意をぐるぐると考える凌一がいる。男は単純な生き物だ。なんならあえてそれとこじつけてしまうほど、頭の中は煩惱の塊だったりする。

——できる？ それはつまりそういうことでもいいのか？ そのことで合っているか？

できる、それは男と女の……そんな悶々と思ひ悩む気持ちとは裏腹に、ポロリと言葉をこぼしてしまった。

「余裕でできる」

なんと情けない生き物なのか。バカか俺は……と、素直に気持ちを吐露したことを冷静に客観視できる自分もまだいる。いるが、煩惱まみれの自分もいるのでどうしようもない。

できるならしたい、なんならしたい、したくなった。そんな邪な気持ちに気づかれた気配は感じないが、赤く頬を染めるその顔が単純に可愛くて。さらに火照ったように照れてポソッとこぼすのだ。

「じゃあ、してほしい」

——おい待て。可愛すぎんか。

「お願い」

そこにまだお願いまでしてくるのだから煩惱が揺すられる。お願いされる状況がおかしい、言い出したのはこちらではなかったか。しかも上から目線で煽るように言ったのに。それをこんなに可愛く窺うように言われてはたまらなくなる。

これはどこまで本気で……いや、本当に本気なのだろうか。信じたい気持ちは無視できないのだが、気持ちが昂るのは綾一も同じだった。

——これを、どうかの男にもしてるかと思うとたまんねえな。

そんな気持ちになるほど、もう気になっていたのかもしれない。目の前の……綾乃のことが。

「じゃあ行く？　このホテルに部屋、取ってるんだよね」

「え？」

「一晩……俺と過ごす？」

見上げてくる瞳が揺れている。温かみのあるシーリングライトの光を吸い込んで、よりキラキラ輝くように。その瑞々しい瞳が、揺れて光ると触れてみたくなるほど興味をそそられた。そんな感情に襲われる綾一に、潤んだ瞳は見つめてきて言ったのだ。

「今夜、私と一緒に過ごして」

第二章　くちびるの記憶

カトラリーなどを下げられて食後のコーヒーが運ばれてきたが、それを横にずらしてテーブルに額を擦りつけるような勢いで綾乃は頭を下げている。

「大変……ご迷惑をおかけしました」

なんならこの場で土下座したいくらいである。でもそれは綾一の顔を潰しかねないと、とりあえずできる全力で頭を下げた。

「同意のもとだから、そこは謝らなくてもいい」

「それでももう、なんとお詫びをすればいいか」

聞くんじゃなかった、そう思うほどの失態。忘れたままの方が良かったかもしれないと綾乃は速攻で後悔している。

「お詫びかぁ……それどういう意味？」

「え？」

ジッと見つめてくる綾一の瞳は、綾乃の真意を突いてくる。

「そ、それは」

「忘れないでね？」

——え？

「俺、藤谷さんの初めての男」

ニコツと微笑みながら言うその直球な言葉にボンッ！と、綾乃の顔はわかりやすく赤面した。その素直な反応にプツと噴き出した凌一は、どこか嬉しそうに見える。明るい表情で楽しそうに見つめられて、ますます居た堪れなくなる綾乃は必死で言い返した。

「そぞ、そういう言い方はやめてください！」

「事実」

「そうだけど！」

「あの日はごめんね？ 呼び出されてどうしても行かなくちゃいなくて」

あの日——それは翌日の朝のことか。目覚めた時、綾乃は広い部屋にひとりきりだった。静かな部屋、空気さえ高貴な香りが舞うような独特で特別な異空間。だから目覚めたベッドの上でぼんやりと本当に夢だったのでは？ そう思ったほどで。あの日のことを思い出すと若干ぼうつとしてしまった。そんな綾乃を窺うように聞いてくる。

「身体、大丈夫だった？」

「っ！」

あの日を氣遣われてまた赤面してしまふ。うまく返したいものの大した言葉も選べず黙ってしまった。忘れている、そう言ったはずなのにこの反応は……綾乃自身が戸惑っているのだ。すぐさ

ま対応できるわけがない。そんな戸惑う綾乃を見つめる凌一は耐えられず、といった感じで口を開くのだ。

「なんだ。覚えてないなんて嘘じゃん」

覚えていないは嘘ではない、それでもあの日のことを忘れた日などないのだ。

「そっか、良かった」

——え。

「俺のこと、ちゃんと覚えてんじゃん——身体は」

イケメンが放つ言葉としては暴力的すぎる。やめてくれ、綾乃は思うがもうそんな言葉さえ言えないほど絶句、つまり凶星なのだ。

あの朝も、それから数日経って……綾乃は自分の身体の違和感を見えなかったのだから。

適度な疲労感、下腹部奥の鈍痛と、精神的解放感は自分が処女というコンプレックスから解放されたからこそ得たものだと思えていた。そして目覚めたベッドの上に残された鮮血がすべてを物語っていた。自分は確実に誰かに抱かれた、その事実をあの朝受け止めて、胸の中に大事にしまって帰った。

湧き上がる高揚感と、少しの不安。でも後悔などひとつもなかった。何よりも喜びが勝っていた。もしあの朝、横に処女を奪ってくれた相手がいてくれたのなら綾乃はどうしていただろう。それこそ土下座してお礼を言っていたかもしれない。

そんなあの時の感情を思い出して、綾乃の頬は一気に熱を帯びた。必死で表情を押し殺そうとす

るが、この顔の裏側でどんな感情が揺れ動いているかまで見透かされてはたまらない。凌一の射抜くような視線から逃れるように俯くものの、もはや隠し通せるはずもなかった。自分でも制御できないほど、耳たぶまでが赤く火照っているのだから。

そんな綾乃の動揺をまるであばき出すように、凌一のまなざしが執拗に注がれる。見つめられれば見つめられるほど思うのだ、凌一から逃げられる気がしない、と。迫ってくる圧倒的な熱量を前にして、綾乃は抗いようのない予感に震えるしかなかった。

なかったはずの記憶が植えつけられたことで、綾乃は日々の仕事がよりやりにくくなってしまった。新しくやってきた次期社長候補が、行きずりのワンナイトの相手だったのだ。笑えない話である。とんでもない相手に処女を捧げてしまった。

——大変なことしちゃった。大事な息子に何をしてくれたんだ！　ってこれ懲戒解雇にならないかな……

処女を失くして万歳！　ついでに職も失くしました！　なんて、本気で笑えない事態である。そしてなにやらほかにもこぼしていそうなのだから。

「酔っていると案外素直だったよ？」

そんな風に、含んだ言葉で揶揄うように言われてまた絶句した。言わなくてもいい悩み諸々までこぼしていそうで恐怖しかない。

これはもう、完全に弱みを握られている。綾乃はそう感じていた。今まで楽しみに来ていた職場

はまるで戦場のごとく張り詰めた環境に早変わりしてしまった。

それからはただビクビクと怯えながら、日々業務に勤しんでいる。休みたいが本音でも仕事は山ほどある。新ブランド立ち上げでどの部署も目まぐるしく仕事に追われている。そんな個人的な我儘がまかり通るわけもない。そして綾乃自身、広報アシスタントとして仕事はたくさん抱えているのだ。

その仕事内容は凌一と絡む案件が多い。新ブランドのコンセプトやインタビュー記事のすり合わせ、そしてそれをチェックしてもらう。凌一からコピーを考えろと直接仕事を振られることだってある。そのたびに案を投げては指示を受け、打ち合わせ……避けたくても避けられない日常を繰り返すことになる。そしてそれは同時に、凌一の仕事への姿勢や人柄に触れる機会も増えるということだった。

——仕事中は雰囲気ちよつと違うのよね。フランクではあっても、距離感はある。

ヒエラルキーの差をなくさせるような振る舞いはしている感じだが、ちゃんと一線は引いている。仲間意識はもちろん強い。でも慣れ合う感じはなかった。そのフランクさに調子に乗って距離を詰めるスタッフが、笑顔の対応ながらも一瞬でシャッターを閉められて落ち込んでいたりする。そしてそんな部分で綾乃は感じるのだ。やはり雲の上のような人だ、そんな風に。

「お忙しいところ失礼します。ここに承認サインをお願いします」

稟議書に印鑑を押してもらうために、綾乃は凌一の執務室を訪れ書類を一枚差し出した。

「ん」

パソコンから視線を外さず書類を無造作に受け取った綾一は、キリがいいのか書類に目を通す。
「ペーパーレス化、あんまり進まないね」

「電子申請も増えましたが、書類を物理的に回したことで読んだ証拠を残す風習もまだまだあるんですよ。本社は知りませんが、傘下グループは上層部の紙文化が根付いていてなかなか。原本保管も監査の時などにまだ求められがちですしね」

「ふうん……しようもな」

——最後の一言は聞かなかったことにしよう。

綾乃は瞳を閉じてスントとした表情で綾一の言葉を聞き流す。海外企業で仕事をしてきた綾一にとっては、日本企業の風習に違和感や戸惑いも多いのかもしれない。

「はい」

「ありがとうございます」

声にハツとして瞳を開けて、差し出された書類を受け取って目にした綾乃は思わず声を荒らげた。

「ちよっ！ なん……何してるんですか！」

「え？ サインでしょ？」

「サイン……印鑑です！ ハンコをください！」

「ええ？ サインじゃダメなの？ ハンコ？」

捺印部分には達筆な筆記体で派手にサインがされている。欲しいものはこんなかつこいいサインではない。

「サインなんていりません！」

「俺のサイン結構レアだよ？」

「レアとかいいです！ ここは日本です！ ハンコ！」

「ええゝマジか。ハンコって……え、ハンコって俺、持ってたかな」

「ええ!?」

普段の仕事ぶりからは想像できないような、そんな天然みたいな抜けた部分たまに見せてきたりする。仕事ができても配れるような男の、そんなギャップを「可愛い」と思わない女がいるだろうか。

「もうっ……もう一度印刷してきますので。ちゃんと印鑑用意してくださいね」

「誰か持つてるだろ。藤谷さんが代わりに押しておいてよ」

「はあ!? 代表の印鑑を、私が勝手に押せるわけじゃないですか！」

それでもそんな風に、綾乃にだけはどこかボーダーが剥がれるのか。フランクとも違う、親しげな様子を見せられて綾乃は無駄に心拍数を上げてしまうのだ。

勘違いしてはいけない、そのたびに言い聞かせている。

ワンナイト、簡単に越えることなどない一線を自分たちは越えてしまった。出会ったあの夜は、お互いを知らなかったとはいえ、ふたり過ごした時間に嘘はつけない。忘れられずにいるのは事実だ。綾乃も、きつと凌一だつて。

けれど綾乃は思う。あの夜はまやかしのようなひと時のものだったと。綾乃の積年の願いを叶え

てくれた夢のような時間だった。ただそれだけのことでもう終わった話なのだ。

そう心に言い聞かせる。言い聞かせないと、自分がどんどん凌一との距離感を踏み違えてしまいそうで怖かった。

だからこそ、今は目の前の仕事にだけ向き合おうと綾乃は心に決めていた。この新ブランドがた成功するように。自分の心惹かれるものが形になるために、凌一の目指す思いが現実になるように。そんな思いを胸に秘めつつ、凌一の印鑑を持つ人物を捜し歩くのだった。

「地元の工房取材に行きたい」

そんなことを突発的に言う凌一に、周りは一瞬哑然としているのだが、凌一を良く知るスタッフたちは慣れっこなのか。若干の呆れは見えるものの、それに文句や意見はさほどなさそうである。わかりやすい溜息はつかれてはいるものの、咎められる様子は見られない。

——こんな感じなのかな。思いついたら行動する、みたいな？

自分には一生縁のなさそうなその性質を、綾乃はどこか他人事のように、冷ややかに眺めていた。もちろんそんな行動力に綾乃が胸をときめかせているわけもない。

「今からですかあ？ 別に構わないですけど……今は誰も凌一さんについていけませんよ」

「あっそう」

「夕方のスケジュールは詰まっています、それ忘れないでください。それと絶対！ ひとりではダメ、ひとりで行くのは禁止ですよ！ あなた放浪癖ありますからね！ 必ず連絡がつくように誰かはつ

けてください」

そして案外子どもっぽいひとなのだな、そんなことを綾乃は背中越しに聞きつつぼんやり思っていると、火の粉が飛んできた。

「はいはい、わかってるよ。藤谷さんに来てもらうから」

——は？

いきなり自分の名前が挙げられて一瞬空耳かと思った。それくらい凌一は自然に綾乃の名を呼んだのだ。

「そういうことでよろしく、藤谷さん」

「え、あの」

「この工房をおすすめしてるの、藤谷さんだもんね？ 資料読んだよ」

そう言いながら、これ見よがしに綾乃が作成した資料を満面の笑みと一緒にチラつかせられる。

「この藤谷さんのまとめた資料を読んで実際目で見たくなった。広報アシスタントだし取材も兼ねて……いいよね？」

——は？ は？ は？

いいよね？ とは何の確認だろうか。さっぱり事態についていけない綾乃だが、助け船を求めるように直属の上司に視線を送るもののその視線は緩く逸らされてしまった。上司も文句など言えるわけがないのだろう。あれは「自分で何とかしろ」のサインに違いない。助けてもらうどころか売られてしまった綾乃は、有無を言わせぬ凌一にまるで連行されるように連れ出されてしまったのだ。